

## 金砂小祭礼

平成十五年に金砂神社の大祭礼があったことは記憶に新しいところで、丑年にあたる今年には西金砂神社の小祭礼の年にあたっており、六年前が大祭礼だった今回は、十二年ぶりの執行となります。

の湯へも一時間半というおすすめのハイキングコースです。  
**◇「お金砂さん」は当市にも関係深い水の神**

西金砂神社の氏子は、旧金砂郷町の上宮河内・下宮河内・赤土と、旧山方町諸沢の四地区です。西金砂神社は所在も常陸大宮市内ではありませんし、大・小祭礼の行列も通らないので、私たちにはちよつと縁遠い気がしますが、諸沢地区は氏子四地区の中で最も戸数が多く、また、北塩子や上村田にはお金砂さんを氏神としている例もあります。

昔から「金砂の雷は常陸一国の雨」と言われてきました。これは金砂の神が、水神であることを表す言葉で、久慈川の支流である諸沢川や浅川の源流、そして山田川の支流の多くは西金砂山や東金砂山を源としており、信仰圏がその流域の地域に広がっているのもそのためと考えられます。

神奉地の上流で諸沢川が流れ込む常陸大宮市内の久慈川流域も例外ではなく、この水の恩恵をこうむる者はお金砂さんの御神徳にあずかっていると解釈され、祭礼等の寄附にも応じ、毎年十二月（かつては旧暦十一月）十二日の祭り金砂マチにも、市内の人々が大勢参拝してきました。

**◇小祭礼の歴史は千二百年!?**  
 伝承によると、第一回の小祭礼は平安時代の弘仁六年（八一五）で、その間一度も休むことなく実施さ

れ、今年の小祭礼で一九八回を数えるそうです。

大祭礼が七十二年ごとの未年に西・東両金砂神社で行われるのに対し、小祭礼は六年ごとの丑年と未年に西金砂神社のみで執行され、三泊四日をかけて、御神霊と供奉行列が常陸太田市馬場八幡宮までの間を往復します。ちなみに、祭礼の周期を七十二年ごとと七年ごとともいうのは、数えでの言い方です。

今年三月に予定されている小祭礼の日程は次の通りです。  
 十九日(木) 出社中染仮殿へ 中染泊  
 二十日(金) 祭典・田楽 町田火消行列 中染泊  
 二十一日(土) 中染発 和田祭場で火消 練込・祭典・田楽 太田馬場で祭典・田楽 中染泊  
 二十二日(日) 中染発 花纏練込・神馬 行事・火消練込 祭典・田楽 潮水行事 入社

二十日は春分の日ですので、三連休という方も多いため、全国的にも有名な金砂田楽と、古式ゆかしい祭礼を拝見する絶好の機会となるでしょう。

### ◇諸沢地区と金砂小祭礼

その昔、西金砂山には七堂伽藍が建ち並び、諸沢地割の堂平には千手観音を安置したお堂があったといえます。諸沢地区の人々は、何百年という長い年月、金砂山を信仰し祭礼に関わってきました。それだけに、祭礼の組織や取り決めも複雑で、行

列に参加する家柄なども、かつては相当やかましかったということですが、諸沢地区は五区に分かれており、氏子総代は各区より一名選出されていますが、地区の祭礼を取り仕切るには、小祭礼ごとに選ばれる、各区大世話人一名相世話人二名、合わせて十五名の世話人さん達です。そして、この世話人さんの取りまとめ役として、山後見人（事実上の実行委員長）と宿後見人（事務局長といったところ）が地区全体から選出され、諸沢地区の小祭礼実行組織の立ち上げりとなります。

西四ヶ村とよばれる氏子地区では、それぞれ花纏を作り、最終日の神社境内に行列を組んで練込むのが慣わしとなっています。諸沢でも三月に入ると花纏作りが始まり、練込の行列で奏するお囃子の稽古にも熱が入ります。

諸沢の行列は二十二日の練込に備えて前日に笠揃えを行い、事務所から鏡泉院を経て十二所神社まで練り、祭礼終了後の二十三日も、笠ぬきとして行列で十二所神社に向かいます。

小祭礼を支えている地区は、いずれも少子高齢化に悩む山間地です。諸沢でも今回は、お囃子から子どもたちの姿が消えてしまいました。

伝統ある地域の祭礼や行事をどのように伝え遺していくか、私たちは岐路に立たされているのです。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450

### ◇西金砂神社の諸沢道

今から八百年もむかし、佐竹氏が立てこもり、かの源頼朝が攻めあぐんだ歴史の舞台、西金砂山。駐車場から長い石段を登れば、荒々しい岩盤の上に立つ本殿周辺から、美しい山並みと日光や那須の山々、条件がよければ富士山まで望むことができます。この美しい景色を楽しみます。つ、本殿

背後にある山道をゆつくり下つてゆくと、三十分ほどで諸沢三区に到着。三太



▲西金砂山からの眺め